

国定小学校用国語教科書第4・5期の俳句研究

A *Haiku* Study on the 4th and 5th “Official Japanese Readers” of Elementary Schools

中 嶋 真 弓

NAKASHIMA, Mayumi

1. はじめに

2011年度使用開始教科書5社の俳句教材の採択を見ると、芭蕉、蕪村、一茶の作品が多く採録されているが、これらの俳句は国定国語教科書の時代からすでに採択されている。

そこで、本小論は、国定国語教科書に本格的に俳句教材が登場する第4期、そしてそれを受け継ぐ第5期に登場する俳句の採択意図を特に趣意書を基に究明するものである。

2. 国定国語教科書第4期の俳句の特徴

2-1. 第4期における教材採択の構え

第4期の教材全体の特徴について、海後宗臣は「新読本の根本方針として、教材は国語独自の立場を尊重し、なるべく言語、文学に限定し、教材の排列には児童の心理と生活を重んじている。特に井上超は文学教材を重視し『昭和を代表する新読本、少なくとも教材の選択及び表現に於て、常にそれが文学たるべきことを目標とし、単なる実科内容の記述たることを避け、何等かの意味に於て国家的・人生的生活と交渉する相を切取って表現することを念としている。』とのべている。その点、文学といっても、いわゆる純粋文学でなく、国家、社会、文化、人生を含めた広い意味での文学としての教材を編集して教科書とする考えであった。」¹⁾と記している。「国家、社会、文化、人生を含めた広い意味での文学」という時代背景的な前提はあるものの、文学的要素、匂いがする教材を組み入れようとする姿勢を見ることができる。井上超はこの点について「巻一を先づ三部に分つた。(中略)これを素材的方面からいへば、第一部は即ち童謡の胎生萌芽であり、第二部は主として児童生活であり、第三部は童話である。さうしてこの三要素を以て巻二以降が進展する。(中略)童謡はやがて児童詩(巻五・巻六)へ、詩(巻七以降)へ、又和歌俳句(巻九以降)へと展開する。(中略)新読本では、かくの如き発生的展開に随つて教材が選択排列されてあると共に、一方幼児期と児童期との精神発達の特異性からも、教材選択及び表現の上に於て顧慮されているところが頗る多い。」²⁾と記している。学習者の発達段階を踏まえた上で、時代的な制約は

あるものの、教材が教材として連関しながら価値をもつように系統性が考えられていたことが分かる。そして、採択された教材について藤富康子は、「国民教育での最後の国語読本であり、国語教育をしめくくる意義を持つものとして、日本文学を中心として、日本文化の大系を認識させる目標のもとに教材が編集されている。巻八からはじまった古典教材に巻九から和歌・俳句が加わり、(中略)「吉野山」といった地理的・歴史的文化教材とも連携」³⁾とされている。また、氏は、同書で島津久基の祝辞を載せているが、その中に、「いわゆるサクラ読本以来、古事記・万葉集・古今集(中略)芭蕉・蕪村・一茶・良寛(中略)ほとんど国文学上の重要な作家作品を網羅し、しかもそれを体系的に排列し、この国語読本を通覧すれば一箇のりっぱな少国民文学史が、そこに編まれていることが知られるのであります。かくのごときは、それ以前の読本には決して見ることを得なかつたところであります。」⁴⁾とある。

今までの国定国語教科書の採択では、「忠君愛國ノ精神」が感じられることが多々あった。それに対して、第4期は、その精神を受けつつ、さらに、一つ一つの教材に文学的な価値をもたせ、さらにそれを児童の発達に応じて系統的に排列したことが分かる。

そのように採択された教材の中に、俳句がある。俳句登場について、『趣意書』には、「本巻から、韻文として和歌・俳句を採澤した。」⁵⁾とある。そして、その登場を秋山喜三郎は、「わが國文學の精髓をなす和歌・俳句が採澤せられたことも新しい試みである。従來の讀本に於ては文中に引用したものはあつたが、かくの如く課を設け、和歌・俳句として體系的に提出せられたことは、新讀本の一特色と見ることが出来る。」⁶⁾とされている。

では、どのような俳句がどのような趣旨で採択されたかを次項で見ていくこととする。

2-2. 第4期の俳句の特徴と採択意図

国定国語教科書に初めて俳句が登場したのは第2期『尋常小学読本』巻十一 第一課「吉野山」である。散文の中に和歌→俳句〈これはこれはとばかり花の吉野山。〉→和歌→和歌→俳句〈歌書よりも軍書にかなし吉野山。〉の順で提示されている。この採択は、俳句そのものの学習というよりは、日本の歴史的なよさ、日本人の風趣が息づく風土を印象付けるための教材として第一課に置かれたものと考えられる。秋田喜三郎は、この採択について「僅少であるが尋常小学読本に国粹文学たる和歌俳句を採り入れ、趣味読本の本領を發揮したものである。」⁷⁾とされている。

本格的に俳句教材が採択されたのは、第4期である。この採択は、前述した第2期の採択形態ではなく、俳句単独の課が設定されている。

第4期に登場する俳句は、次の課のものである。

- ◆『小学国語読本巻九』 ◇第十一 「雀の子 一茶」
- ◆『小学国語読本巻十』 ◇第七 「朝顔に 千代」
- ◆『小学国語読本巻十一』 ◇第一 「吉野山」 ◇第二十 「蟲の聲」

◆『小学国語読本卷十二』 ◇第二十一 「雪残る頂」

この採択の関連性について秋田喜三郎は、「和歌と異なり、俳句は従来の読本に採択せられることは極めて少なかったのであるが、本書は和歌と同じく児童に親しみ易い童心の豊かな一茶の句によって俳句の理會を与へ、次に千代の句によって、その理會を深め、更に卷十一は『蟲の聲』によって鬼貫・芭蕉・蕪村等の俳豪の作品を提出し、卷十二の『雪残る頂』により、子規・鳴雪の句によって現代俳句を代表させ、俳句に対する鑑賞の力を養ふことに努めてゐる。』⁸⁾と述べている。文学史的な流れも考慮しながら、それでいて俳句学習の冒頭に児童に親しみやすい一茶の作品を導入し、これからの学習への足掛かりにしていることを伺い知ることができる。

以下、それぞれの課について見ていく。

2-2-1. 『小学国語読本卷九』に採録された俳句の特徴と採択意図

本格的に俳句が登場したのが『卷九』第十一課「雀の子 一茶」で、採録されている俳句は以下のようなものである。

◇第十一 雀の子 一茶

- * 雀の子そこのけそこのけお馬が通る
- * さあござれこゝまでござれ雀の子
- * 赤馬の鼻で吹きけり雀の子
- * やせ蛙まけるな一茶これにあり
- * やれ打つなはへが手をする足をする

『趣意書』によれば、「一茶の作を最初に選んだのは、専ら純真な児童の心理に適合するものがあるからである。」「小林一茶の作品中から、最も有名で、児童の興味に適することを標準として選んだもの。』⁹⁾とある。この採択を受けて、大岡保三は、「児童の理解に容易なことを第一として一茶の句を掲げた。一茶の作品が字句は卑俗でやさしく、内容も童心に觸れる所が多いからである。』¹⁰⁾としている。同様の解釈として、秋山喜三郎は「一茶は童心の豊かな俳人であり、好んで小動物を詩材にして、純真な児童にも容易に喰入る作風を示した句が多い。新讀本が和歌と同様、童心深き一茶の句から提出せられたのは巧妙な方法といへよう。（中略）動物愛を中心とした児童に共鳴し易い句によって、俳句の文學様式を理解させることを目的としてゐる。俳句の何物であるかも知らない児童でも、かうした平易な句によれば、句のもつ面白味も自然に理解せられると思ふ。』¹¹⁾と述べている。つまり、採択意図は「純真な児童の心理に適合する・児童の興味に適する」というのであり、これらの五句がそれにふさわしいとの判断からということが分かる。第2期「吉野山」で登場する俳句提示の意図とは違い、俳句を文学と捉えそれを味わう、日本人として味わわせる価値のあるもの、しかも最も児童の心に入って行く作品、それをすべて持ち合わせているのが一茶の句であり、それを俳句の導入にもってこることによって、以後の学習に親しみや深まりを与えると考えられたのである。

2-2-2. 『小学国語読本卷十』に採録された俳句の特徴と採択意図

一茶に続き登場するのが、千代である。

◇第七 朝顔に 千代

- * 朝顔につるべ取られてもらひ水
- * 木から物のこぼるゝ音や秋の風
- * 月の夜や石に出て鳴くきりぎりす
- * 何着ても美しうなる月見かな
- * ころぶ人を笑うてころぶ雪見かな

『趣意書』には、「巻九に於て始めて掲げた和歌、俳句の教材は、本巻に入つて更に一步を進め、特に和歌は古代から現代に至るまでの例を示すに至つた。」¹²⁾とある。『巻九』で一茶、そして、それを一步進めて『巻十』に千代が採択されたのである。大岡保三の文言を借りるならば「一步進める」とは、「前よりはやゝ高い詩趣を鑑賞させる」¹³⁾と捉えることができるのではないだろうか。ここで注目したいのは、女性である千代が採択されたことである。『趣意書』には、「女子作家として有名な千代の句を選んだもので、こゝに掲げた五句は句集として最も確實といはれる『千代尼句集』『俳諧松の聲』に載つてゐるものである。」¹⁴⁾とある。また秋山喜三郎は、「千代尼の優美な句によつて、句のもつ文學情趣を鑑賞させることを目的としてゐる。何れも理解し易い平易な句で、女性の優美な心根が詠まれてゐる。こゝに注意すべきは、この五句には何れも季題が明らかに示されてゐることで、朝顔、秋の風、月の夜、月見は何れも秋、雪見は冬を示してゐる。かくて巻十一には『蟲の聲』の一課に、鬼貫・芭蕉・蕪村等俳豪の作品を提出し、いよいよ俳句鑑賞の本格的指導に入つてゐる。」¹⁵⁾としている。さらに氏はこの頃の国定国語教科書について「女子的教材に重点をおき、各方面に亘り女子の能力の現はれた教材が多く採択されたことは、女兒のために好資料を与えたものといえる。」¹⁶⁾とも述べている。「女子の能力の現はれた教材」の一つとして千代が採択されたともいえるのではないだろうか。当時発行された千代に關係する児童用図書には、次のような叙述が見られる。

◇1910 (M43) : 『ポケット少年おとぎ』¹⁷⁾

- ・子供の時から風流の道に心掛けありて、俳諧を嗜んで
- ・遂に天下に名をあげて、今は加賀の千代と云えば誰れ知らぬ人の無いようになりました。

◇1916 (T5) : 『少女お伽話』¹⁸⁾

- ・生まれつき極伶俐
- ・学問が好き
- ・(俳句を) おぼえて
- ・此の本は昔の女のえらい人のことをしらべて

◇1942 (S17) : 『加賀の千代女』¹⁹⁾

- ・西洋人の知っている日本の俳人の名まえは芭蕉と千代女くらいなものです。それほど千代女は有名ですが、千代女についてくわしく知っている人はごく少ないのです。そればかりではなく、まちがったことの方が多く伝えられているのです。
 - ・日本の女流俳人をせおってたっていたような人気
 - ・千代女は、男におとらないように一心に俳句を勉強したばかりではなく、常に女として世間からわるくいられないような身の持ち方に気をつけたのです。
- これらを整理すると、次のような千代像や俳句の特徴が見えてくる。
- ・賢い女性。
 - ・時代の中で、確たる意志をもち生き抜いた強い女性。しかも、その中で女性としての身の振り方や生き方を忘れない。
 - ・女性俳人の代表。

これらの児童用図書を手にした子ども達にとって、千代は頑張りやで時代の逆境にも負けない強い女性、堂々と生きている女性として写るであろう。そして、そのような千代を採択することは、国を支える強さを子ども達に与え、生き方の指針となる効果があるのではないかと考えられる。

一茶の俳句が、一茶の生き方から生まれ、児童にも受け入れやすく心引きつける魅力があることによる採択であるならば、千代の俳句もまた、児童に分かりやすく、その上、魅力的な女性から生み出される作品として採択されたのではないかと考えるのである。

2-2-3. 『小学国語読本卷十一』に採録された俳句の特徴と採択意図

第一課には、「吉野山」が提示されている。これは、前述した第2期「吉野山」に修正を加えたものである。そして、第二十課に、鬼貫・芭蕉・蕪村が登場する。

◇第一 吉野山

第2期『尋常小学読本』卷十一にあった教材を修正したものであるが、採択されていた二句のうち、支考の〈歌書よりも軍書にかなし吉野山。〉が削除された。『趣意書』には、「修正の部分は主として最初と最後である。敘景といふよりも寧ろ抒情的な紀行文で、吉野舊蹟に對する懐古的な史的感情が表現の主題となつてゐるが、爛漫たる櫻花と國民的感情と、自らなる對照の妙を味はふべきであらう。」²⁰⁾とある。

◇第二十 蟲の聲

- * 行水のすて所なし蟲の聲 鬼貫
- * 名月や池をめぐりて夜もすがら 芭蕉
- * 枯枝に鳥のとまりけり秋の暮
- * 山路來て何やらゆかしすみれ草
- * 春の海ひねもすのたりのたりかな 蕪村
- * 菜の花や月は東に日は西に
- * さみだれや大河を前に家二軒

『趣意書』には、「俳諧文學の最高峯をなす作者鬼貫・芭蕉・蕪村の代表作中、特に児童の理解に適するものを選んだのが此の教材である。排列は、鬼貫・芭蕉・蕪村と、作者を時代順にした上、各句を秋から夏へ列ね、以て第二『見渡せば』に相對照せしめた。』²¹⁾とある。また、大岡保三は、「俳文學の最高峰たる芭蕉・鬼貫・蕪村三大家の作品を掲げることとした。俳人としての地位の上からも、句の性質の上からも、この三人が代表的俳人として児童に示すに最も適當なるべきを信じたからである。尚、掲載する句としては理解し易く、且個性の強く出ているものを選んだ。』²²⁾としている。「俳諧文學の最高峯」である鬼貫・芭蕉・蕪村の代表作であり、かつ児童の理解に適するものとしてこれらの俳句が選ばれたのである。

芭蕉・蕪村それぞれ三句と鬼貫一句と句数に違いがある。大岡保三は、三俳人の採択や指導法について「(芭蕉の句は 筆者補) 無理に児童に分からせようとしないで、あつさり取扱へばよい。幼い心に種子を下してさへおけば、素地がよければ必ずや花が咲き實を結ぶ(中略) 蕪村の句は漢語が多いので一見難解のやうに見えるが、彼の客観的繪畫的な表現は、児童にも鮮明に其の意を把握させることが出来て、この種の教材としては、寧ろ蕪村本位にゆくべきだとの感を深くした。(中略) (鬼貫の句は 筆者補) 磊落飄逸な中に高い氣品の認められるのは、彼の人物の反映であろう。』²³⁾としている。句の排列については、「句の順序は、第二課の和歌が春から秋へ並んでいるのに對し、これは秋から春へと排列した。』²⁴⁾とある。

西原慶一は、『卷九』～『卷十一』の俳句の系統性を学びの面から分析し、「斷乎とした心をあらはした一茶の句によつて俳句の世界に近づき(卷九「雀の子」)、優婉繊細な女流俳人によつていよいよ俳句にしたしんだ(卷十「朝顔に」) 児童は、本卷の『吉野山』において、蕉門以來もてはやされて來た安原貞室の吉野山の一句をとび石として、こゝに代表的俳人の名句のうち児童の理解に近くしかも季節に適當な句を本格的に採用したものであろう。こゝに俳句の世界は、児童の生活の前に親切に展かれたのである。鑑賞のみならず、俳句もまた生活の要求として湧きおこるのであろう。』²⁵⁾と述べている。また、秋田喜三郎は、「俳句は卷九の『雀の子』の上に立つて千代尼の優しい自然美を詠じた句を出し、(中略)『蟲の聲』は卷九の『雀の子』、卷十の『朝顔に』の上に發展したもので、鬼貫、芭蕉、蕪村等俳匠の名句を採つたものである。(中略) 古道精神の顯現として(中略)『吉野山』等を数へ、日本芸術の創造としては、『源氏物語』(中略)『蟲の聲』があり』²⁶⁾としている。

この頃に提示された俳句教材は、日本人として知っておくべきものであり、発達段階を踏まえた上で、学習の高まりを見ることが出来る排列といえるのではないだろうか。そして、俳句の定番として、「一茶・芭蕉・蕪村」という構図が見えてくる。

2-2-4. 『小学国語読本卷十二』に採録された俳句の特徴と採択意図

『卷十二』の第二十一課には、次の俳句が採択されている。

◇第二十一 雪残る頂

* 雪残る頂一つ國ざかひ 子規

- * 菜の花や小学校のひるげ時
- * 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺
- * 犬が来て水のむ音の夜寒かな
- * 夕月や納屋もうまやも梅の影 鳴雪
- * 矢車に朝風強きのぼりかな
- * 夏山の太木倒すこだまかな

『趣意書』では、「本巻は卷十一と同様、國民文學・思想及び文化に關する教材を中軸として編纂し、以て尋常小學國語教育に於ける最後の使命を果たすことに留意した。即ち(中略)『雪残る頂』(中略)は、國文學に取つた教材であり、(中略)我が國民思想・文化と交渉する所の甚だ深いものである。」²⁷⁾「明治俳壇の代表として正岡子規・内藤鳴雪二人の作を選んだのが此の課である。卷十一『蟲の聲』の徳川時代と相聯繫して、そこに史的展開をたどることも出来る。」²⁸⁾とある。『卷十一』までが、江戸時代の作品であるのに対して、『卷十二』では、明治の俳壇の代表として子規・鳴雪が取り上げられている。秋田喜三郎は、「『雪残る頂』に明治俳壇の子規・鳴雪両巨匠の名作をかゝげ、これまた前巻に提出せられた俳句教材と相呼応して、わが国の俳句史を大系づけている。」²⁹⁾と述べている。

文学史や作品の難易度等の関わりで各巻の関連が図られていることが分かる。このように見ていくと、江戸時代までの俳人としては、一茶・芭蕉・蕪村、明治以降は、子規という採択傾向が見られる。

『卷九』から『卷十二』の採択をたどれば、「①児童に分かりやすい・受け入れられやすい俳句 ②文学史の系譜の中で最も有名な俳人及び俳句」が発達段階に応じて排列されているのである。これらの採択による学びの積み上げが、俳句をより深く味わうことにつながり、日本文学の良さを味わう、そしてそれがひいては、日本独特の文学を通して、我が国を改めて強く意識し、国土やそこに生きる日本人としての自覚をより強めていったのではないだろうか。言い換えるならば、これら時代ごとの伝統的な言語文化としての作品やそれを生み出した作者を教科書教材として採択することこそが、正に日本の伝統的な言語文化に親しむことであり日本のよさを知らしめることにつながると考えられたのである。

第4期における俳句教材として採択された作品は、作品そのものの価値、教材として児童にふさわしい作品という観点から選ばれ、時代に翻弄されるというよりはむしろ、日本人の教養として知っておくべきもの、日本人として語り継ぐべき文化、不易なものとして採択されているといえるのではないだろうか。

3. 国定国語教科書第5期の俳句の特徴

3-1. 第5期における教材採択の構え

1941年第二次世界大戦。小学校は国民学校と称される。このような時代の中で、国定国

語教科書も国家主義的傾向が強くなり戦争に関わる教材が多く見られるようになった。

海後宗臣は、第5期の教材の特徴について「国家主義的教材を豊かにし、教材を児童の心理と生活に適應させ、また、教材の文学化をはかるといった前期の国定国語教科書編集方針を受けつぐばかりではなく、第二次世界大戦という社会情勢に應ずるという方針を強く示しているといつてよい。特に、児童の発達段階を四期に分け、その段階にそつて皇國民を育成するように国語が編成されている。」³⁰⁾としている。さらに氏は、四期に分けた第三期(初等科第四、五、六)について、『第三期に入つて現代詩・和歌・俳句等に分化せしめ』しており、『表現の對象は児童の生活から出發して國民生活の諸相に分化展開させる』(中略)『第三期にそれぞれ科目を分ける母胎たらしめ』³¹⁾としている。「文学化」されながらも、「文学」そのものを味わうのではなく、「文学」を通して「日本人としての在り方」「国粹主義的な考え方」を強め深めるために採択されたのがこの時期の教材だと言える。

では、どのような俳句がどのような趣旨で採択されたかを次項で見ていくこととする。

3-2. 第5期の俳句の特徴と採択意図

第5期に見られる最初の俳句は、『初等科国語五』十九「動員」である。「動員」は、大東亜戦争に直接取材されたものである。この俳句が最初に置かれたことから、戦時下の日本が何を求めていたかを伺い知ることができる。

第五期に登場する俳句は、次の課のものである。

- ◆『初等科国語五』 ◇十九 「動員」
- ◆『初等科国語六』 ◇十三 「元日や」
- ◆『初等科国語七』 ◇一八 「ゆかしい心」 ◇十九 「朝顔に」
- ◆『初等科国語八』 ◇五 「奈良の四季」 ◇十八 「梅が香」

『趣意書』によれば、「古典教材に關聯したものでは(中略)『動員』があります。(中略)『動員』は *補筆者)俳句であります、和歌俳句教材もこの四卷中に、一つの系列をなして提出されてをります。この和歌俳句教材を如何に提示するかといふ點について、省察をめぐらしたのであります、結局和歌も俳句も児童の現實の生活に近い戦争と結んで、戦陣の和歌や俳句を最初に掲げることがよからう。また、和歌俳句の入門としては、やはり現代の和歌、俳句からはいつの方が正當であらうといふ觀點から、現代のものを最初に提出することに決定したのであります。これを手はじめに、古い時代の和歌、俳句へと遡らうといふのであります。さうして、現代の和歌が古い傳統の上に立ち、而も今日に於ける新しい役目を果す、つまり傳統をうけ、現代にこれを活かすことによつて、初めて眞の和歌、俳句たり得ることを自然にさとらせようとするのであります。(中略)『卷五』のみについてみれば、大東亜戦争に直接取材した教材、竝に大東亜そのものをわからせる教材が、數多く提出されてをります。(中略)『動員』等は、大東亜戦争に直接取材されたものであり、(中略)わが國防、軍事の諸相、皇軍の眞の精神を自覺させ、八紘為宇の大精神を仰がしめるものであり

ます。」³²⁾とある。「児童の現実の生活に近い戦争と結んで」最初に提示されたのが「動員」である。日本の伝統的な言語文化の一つである俳句でさえも、その時代を象徴するものを背負わされたのである。

以下、それぞれの課について見ていく。

3-2-1. 『初等科国語五』に採録された俳句の特徴と採択意図

◇十九 動員

- * 動員の第一夜なり明けやすき
- * 秋晴れや旗艦にあがる信號旗
- * 敵前に上陸するなり秋の雨
- * 突撃を待つ草むらに虫すだく
- * 敵遠し月の廣野のはてしなく
- * 幾山河愛馬と越えて月の秋
- * 地図を見る外套をもて灯をかばひ

第4期の俳句教材の最初が一茶の〈雀の子そこのけそこのけお馬が通る〉であったのに対し、第5期では戦争そのものを打ち出した教材を提示している。『趣意書』には、前述したように「和歌俳句の入門としては、やはり現代の和歌、俳句からはいつの方が正当」「傳統をうけ、現代にこれを活かすことによつて、初めて眞の和歌、俳句たり得ることを自然にさとらせようとする」とある。言い換えるならば、戦争を詠んだ俳句の根底に脈々と続いてきた伝統的な言語文化として俳句があり、そこに日本人・日本人としての精神が存在する。つまり、戦争もその伝統の上に位置付くものであり、そこに日本人としての姿勢をもって臨まなくてはならないと主張しているかのようである。第4期の俳句傾向とは違い、戦争が前面に打ち出されており、俳句教材にもそれが直接関わっているのである。伝統的な言語文化と称して戦争という題材が詠み込まれている俳句をここに見ることができる。

3-2-2. 『初等科国語六』に採録された俳句の特徴と採択意図

◇十三 元日や

- * 元日や一系の天子不二の山 鳴雪
- * 雪残る頂一つ國ざかひ 子規
- * 島々に灯をともしけり春の海 子規
- * 赤い椿白い椿と落ちにけり 碧梧桐
- * もらひ来る茶わんの中の金魚かな 鳴雪
- * たたかかれて晝の蚊を吐く木魚かな 漱石
- * 山門をぎいととぎすや秋の暮 子規

鳴雪・子規は、第4期『小学国語読本第十二巻』第二十一「雪残る頂」に登場し二度目であるが、碧梧桐・漱石は、初めての採択である。『趣意書』によれば、「今日、戦ひは益々熾烈の度を加へつつあります。『初等科国語六』の取扱の實際に當りましては、常に時局の推

移りに即應し、それと絶えず密接な連絡を取りつつ、教材を生かして行く心掛けが、指導上必要であります。」「『元日や』に於いては、明治の俳句をそのまま取って教材としたものがあります。従つて、これは古典俳句の傳統につながるものであります。』³³⁾とある。戦時下においてこの俳句を古典俳句の傳統につながる、つまり、国粹的な愛国心を今一度強め高めるための有り様として、この俳句を最初にもってきたことが分かる。

付記するが、本課では鳴雪〈元日や一系の天子不二の山〉の上の句をとって「十三 元日や」としているが、『墨ぬり教科書』では、この鳴雪の〈元日や〉が削除されたために、題も「頂一つ」と子規の句から始まっている。

3-2-3. 『初等科国語七』に採録された俳句の特徴と採択意図

本書の採録について『趣意書』には、次のように記されている。「まづ編纂第一に考へられたことは、わが國の古典文學に親しませるやうにしたいといふ點であります。即ち古文、古語を通して、史的感情を豊かにするとともに、現代語を古語と比較することによつて、國語の理解力を確實にしようとするものであります。(中略)これは、散文としての古典であります。韻文の古典も登場して参ります。古典の韻文、つまり和歌や俳句の類であります。(中略)俳句の方では、千代女と一茶の句を組み合せて一課の教材として『朝顔に』といふのがあり、芭蕉や蕪村の句を集めた『梅が香』といふ一課があり、また『奈良の四季』といふ韻文の中には、この二人の他に凡菫などの句も交つてゐます。』³⁴⁾「國體と不可分な皇軍及び國防精神に關する教材が極めて豊富であり、殊に大東亜戰爭の勃發とともに、皇軍の活躍する大東亜に關する諸教材も、また、御稜威の光被と結んで、國體顯現の上に大きな役割を持つてゐるといはねばなりません。(中略)次に、國體とともに存するものは國土でありますので、國土景觀、自然に關するものが、かなり教材化されてゐます。(中略)『奈良の四季』のやうな田園、風景をうたつたものもあります。その他『見わたせば』の短歌や、『朝顔に』『梅が香』のごとき俳句なども、畢竟國土、自然を結局表現したものと見ることができませう。』³⁵⁾「女子教材として、その意義を持つてゐるのを擧げるならば『卷七』に『源氏物語』があり『姉』があり『いけ花』『朝顔』などがあります。』³⁶⁾

この『趣意書』は、『初等科国語七・八』について述べている。時代の特徴として、愛国心を高め、国への意識をより深くもたせるために伝統的な言語文化を介して、国土の美しさや日本人のもつ日本人らしさ、日本人としての精神をより強調する文学をもってきたのである。純粋に文学を鑑賞するだけでなく、日本を象徴するもの、連帯意識を高めるものとして、俳句もその役割を担ったといえるのである。

『初等科国語七』には、次のような俳句が採択されている。

◇十八 ゆかしい心 (この中に「俳句」という項がある)

- * 弾の下草もえ出づる土囊かな
- * 密林をきり開いては進む雲の峯

◇十九 朝顔に

- * 朝顔につるべ取られてもらひ水 千代
- * 木から物のこぼるる音や秋の風
- * 何着ても美しうなる月見かな
- * ころぶ人を笑うてころぶ雪見かな
- * 雀の子そこのけそこのけお馬が通る 一茶
- * やせ蛙まけるな一茶これにあり
- * やれ打つなはへが手をする足をする

「十八 ゆかしい心」は、前述した「動員」同様戦争を扱った俳句である。それを本巻の俳句教材の冒頭にもってこることによって、戦時下における児童に向けて日本国への思いを強めさせるねらいがあるものと思われる。「ゆかしい」とは、「懐かい」、つまり「心ひかれる・なつかしい・昔が偲ばれる」といった意味である。戦時下という現状を伝統的な伝統文化で全て包括して「良き日本」をイメージさせているといえるのではないだろうか。

次の「十九 朝顔に」には、千代・一茶の句が採択されている。千代・一茶の俳句は、第4期『小学国語読本巻九』「第十一 雀の子 一茶」、『小学国語読本巻十』「第七 朝顔に 千代」から登場している。そして、第5期では、『初等科国語七』「十九 朝顔に」で、千代と一茶が一緒に採択されている。千代や一茶の採択理由は、第4期と同様、それぞれの俳句が子ども達に分かりやすく親しみやすいからだと考えられる。しかし、第4期と第5期の採録では以下のような違いが見られる。

- ・第4期は、読本の巻が違い、さらに採録順が「一茶→千代」であったのに対し第5期は、同じ巻でしかも同じ課の採録となっている。また、提示も「千代→一茶」の順である。
- ・第4期は、第5学年上下での採択であったが、第5期は第6学年上の採択となっている。『趣意書』には、その点について何も記されていない。時代による読本の違いがあり一概には言えないが、次のように考えることはできないだろうか。
- ・第4期に比べて第5期の課が減少していることから、第5期に多くの戦争教材を採択したために、課を整理する必要があった。
- ・内容の吟味というより、便宜的に文学史に沿って「千代→一茶」の順に提示した。
- ・第4期のように俳句を味わわせるというより、伝統的な言語文化に触れさせることを通して日本国民であることを自覚させるために、最高学年での採録によってその意識を強めようとした。

ここで、『初等科国語五・六・七』の戦争に関わる俳句でいうならば、俳句という伝統的な言語文化をもって軍人に尊敬の念を抱かせ、さらに、皇国民としての士気を高めるという系統的な教材排列を見ることができる。古典を通して日本のよさを理解させるだけでなく、俳句の場合、その手法を活かして現代につながる内容を網羅し、詠むことができる道具として使われたようにも感じる。

3-2-4. 『初等科国語八』に採録された俳句の特徴と採択意図

◆『初等科国語八』

◇五 奈良の四季

- * 奈良七重七堂伽藍八重櫻。
- * 虫干しやをひの僧とふ東大寺。
- * 仲麻呂の魂祭せん今日の月。
- * 大佛を見かけて遠き冬野かな。

◇十八 梅が香

- * 梅が香にのつと日の出る山路かな 芭蕉
- * 山路来て何やらゆかしすみれ草
- * 古池やかはづとびこむ水の音
- * 春の海ひねもすのたりのたりかな 蕪村
- * 春雨にぬれつつ屋根の手まりかな
- * 菜の花や月は東に日は西に
- * 富士ひとつづみ残して若菜かな

本書には、「五 奈良の四季」「十八 梅が香」の2課に俳句がある。採択の意図として『趣意書』⁷⁾では、「『奈良の四季』については 筆者補) 奈良に對する懐古の情を韻律の上に生かし、各聯ごとにそれに縁のある俳句を掲げ、一層その趣を具象化してあることに注意すべき」「第十八課は『梅が香』。ここは、俳諧史上最も偉大な存在である芭蕉と蕪村の句を収め、俳諧の傳統の根本に觸れしめようとするものであります。句は春の句を主とし、これに夏の句が添へてあります。」「古典教材と相つながるものに、和歌と俳句があります。第六課『萬葉集』の和歌、第十八課の『梅が香』、それから第五課の『奈良の四季』などは、いずれもこの意味から古典的教材として考へられるのであります。」とある。

芭蕉や蕪村の俳句は、俳句教材の王道として時代に左右されることなく採択されている。しかし、見方を変えるならば、これらの俳句を提示することは、文学的なイメージを全面的に出す、日本の伝統的な言語文化に觸れさせるのに効果的であると同時に、最も文学的な作品を採録するということが、その作品そのものが日本を象徴し、日本への思いを強めることにつながるのである。

4. おわりに

本小論は、国定国語教科書に俳句が本格的に採録された第4期、第5期を中心にその俳句の採録意図を特に趣意書によって見てきたが、俳句に限って言えば、第4期は、表立って時代を感じさせる俳句教材はないものの、その日本的な俳句を全面的に出すことによって日本への意識を高めていったといえる。言い換えるならば、一見「時代に翻弄されない」文学的

なものを打ち出しながらこれらの伝統的な言語文化を学ばせることが、ひいては日本への意識を強め、日本のよさを自覚させる、日本をより強く印象付ける、つまり「愛国心」を培う一つの手立てであったといえるのではないだろうか。

そして、第5期は、時代的な背景を全面的に出すことによって、伝統的な言語文化と日常の自分達の生活とは密接に関わりをもっていることをより印象付けているといえる。繰り返すが、第4期が文学的な匂いを醸し出す中に日本文化を自ずと意識付けさせているのに対し、第5期は、直接的に児童の生活に関わる現実を捉えた俳句を突きつけることによって、日本を意識させようとしたと考えられるのである。

◆参考資料 1949年（S24）までに発行された児童用図書 ～芭蕉・一茶を中心に～

ここでは、国定国語教科書が使用された時期に発行された俳句に関わる児童用図書の記述を見ることによって、当時の子ども達が生活の中でどのような内容を目にしていたかを提示していく。対象とした俳人は、国定国語教科書に多く登場している芭蕉・一茶とした。また、対象児童用図書は、芭蕉10冊・一茶15冊（参考1冊含む）とした。

参考資料1 芭蕉に関わる児童用図書

◇1901（M34）：国府種徳『少年読本第42編 松尾芭蕉』博文館

- ・後世幾万の俳人中、一人でも芭蕉に凌駕するものなく其他かく幽玄なるもの、繊巧なるもの、華麗なるもの、奇抜なるもの、滑稽なるもの、温雅なるもの、新奇なるもの、変調なるもの等一瑣事・一微物を取りて其實景實情を穿ち津々なる趣味を含ましむる詩想の卓然たる盡く一人に兼ねる技倆は竟に一人の及ぶものなく（中略）後に蕪村、暁臺、鬼貫、一茶等少々新調奇句を吐きしも皆芭蕉の範囲を脱すること能わず、寔に芭蕉の前に芭蕉なく、芭蕉の後に芭蕉なく真に俳神とこそ言ふべけれ。

◇1921（T10）：島崎藤村『少年読本 ふるさと』実業之日本社

- ・芭蕉翁の名を聞いたことが有りませう。

◇1933（S8）：萩原蘿月『少年文庫44 少年芭蕉物語』春陽堂書店

- ・敦厚な人（中略）普通の俳諧師のやうに人に諂つたり、禮を失つたり粗野な風は少しもありませんでした。常に神佛を敬い先哲を尊び、門人に対しても親切懇懃でした。

◇1934（S9）：吉田絃二郎『少年少女小説集 白き雲なつかし』改造社

- ・やさしい先生（筆者補：芭蕉）でしたから他のお弟子たちもみんな芭蕉のために一生懸命につくりました。

◇1935（S10）：長谷川安一『少年芭蕉物語』大同館書店

- ・過去の日本人にはいろいろと数多くの美点をもっていますが、芭蕉さんはその凡てを兼備していられたように私にはおもわれます。

◇1937（S12）：菊池寛『日本少國民文庫 第7巻 日本の偉人』新潮社

- ・俳句の道の開祖といつてもよい人で、俳句といふ一つの形式の中に、自然の真実の姿を

写しもつて、詩として完成させた人（中略）後世俳聖とまでいはれ、自然の詩人、旅の詩人といはれる

◇1941 (S16)：佐藤春夫『新日本少年少女文庫第12篇 日本文学選』新潮社

- ・芭蕉は熱烈な詩人らしい性質と天才とを持って生まれた上に、不斷の努力によつて、乱れに乱れた詩歌の道を治めて正しい道を明かにし、古来の文学精神に鑑みて、卑俗に流れてゐたその時代の精神を高めました（中略）これはみな芭蕉の努力と天才との賜であります。

◇1941 (S16)：堀尾勉脚本『芭蕉 紙芝居』日本教育紙芝居協會

- ・俳諧十七文字の短い詩形の中に、芭蕉の命は結晶しています（中略）芭蕉は、本当の芸術とは、どんなものであるか、身を以て示した大芸術家の一人

◇1942 (S17)：荻原井泉水『芭蕉さま』実業之日本社

- ・俳句という単純の上にも単純な形式を以て、自然の自然らしさを打出すといふ日本的な文学を創始した人こそ、これからお話する芭蕉
- ・芭蕉は俳句を作る文学者としても立派な人でありましたが、人間としては、一そう立派な人でありました。
- ・芭蕉は自然に生きることの正しさと、単純な生活の清らかさという、この日本精神的な態度を、自分の身を以て体験し、同時にその気持ちを文学として、いかにも日本的な文学として生かした人です。その「芭蕉さま」の話を

◇1946 (S21)：荻原井泉水『芭蕉さま』実業之日本社

- ・芭蕉という人は、徳川時代のえらい文学者で俳句を作ることの名人であった。
- ・芭蕉は、如何に貧乏をしても、立派な文学を書きたいという気持ちをしっかりと持っていました。又、正しい美しい俳句の道を世界に弘めたいという理想を持っていました。芭蕉は、たゞ一人、こつこつと勉強をしていたのです。
- ・芭蕉は俳句を作ることの名人であったと同時に、其言葉からも行からも、私達が教えられる事の多い立派な人
- ・今日でも、多くの人は、「芭蕉」と呼びすてにせずに「芭蕉翁」「芭蕉さま」とかいう風に云います。で、私も「芭蕉さま」という名で

参考資料2 一茶に関わる児童図書

◇1910 (M43)：馬場直美『お伽百題』岡村書店

- ・一茶といふは発句の上手な坊さんであります。（中略）〈己と来て〉と一句やりました。これは未だ八つの時であつたそうです。

◇1928 (S3)：河井醉茗『日本児童文庫 第39 日本立志物語』アルス

- ・日本は昔から戦争の多かつた国で（中略）戦争に強かつた英雄豪傑が誰よりも名高かつたのです。けれども（中略）文化的に優れた人の話を選びました。
- ・一生を苦しみつゞけた人だけれど、最初から俳句に志を抱いて死ぬ年まで俳句を作つ

て、それで押し貫いたのは普通の人には真似のできないことであつた。（中略）子供が大好き（中略）外の俳人には見られない子供の生活が現れてゐる。童謡のような俳句もある。

◇1933 (S8)：萩原蘿月『春陽堂少年文庫 少年一茶物語』春陽堂

- ・一茶の高名は、天下の俳界を風靡して一躍一茶は俳壇の寵兒となりました。そして、一茶没後百余年の今日に至るまで、われわれ一同から、かくの如く敬はれ、かくの如く親しまれてゐる

◇1934 (S9)：本地正輝『面白くて為になる偉人の話』金の星社

- ・一茶といふ人もえらい人としてこの本にのせておきたい
- ・自分がさんざん悲しい目にあつたので、よその人が悲しい目にあつてゐるのを見ると、一しよに泣いてやるほど、情深い一茶でした。（中略）悲しい人には、一茶の句は、なぐさめになります。弱い人には、力をつけてくれます。だから、少しでも俳句や和歌などのことを話す人に聞いてごらん下さい。誰も彼もが口を揃へて「一茶かい、一茶は好きだよ。」と云ふに違ひありません。

◇1944 (S19)：木暮亮『学習者文庫 おらが春 一茶物語』学習社

- ・この物語は、ただ今の決戦下の若い読者たちに、できるだけ明るい気持で一茶を知り、その句を愛誦してもらいたいと願って、書いたものです。
- ・その生涯は、決して順境ではなかつたのであります。しかし、一茶はそういう境遇にありながら、これこそ、じぶんの一生涯の仕事だと思ひ定めた俳諧に全心をうちこんで、生きてゐる間中、勉強をつづけて、立派な俳人となりました。
- ・まれに見る親孝行者
- ・一茶は、故郷の信濃を愛しました（中略）その郷土愛は、つまり、祖国愛とつながるものであります。一茶は、若いころから、国学を学んで、日本の国體のありがたさを知り、この日本に生まれたことを感謝していたのであります。
- ・俳諧の神様といわれている芭蕉翁を、一茶は、心の師匠として、いつもあがめ尊んでいたものでありますが（中略）じぶんの生活を句にすること

◇1946 (S21)：阿部喜三男『少年国文学叢書 一茶』新紀元社

- ・一茶を尊敬しろ、一茶を敬服せよと強ひるやうにお話しするものではありません。ただ不幸な運命にあひ、幾度か非常な境遇におちいりながらも、それに負けてしまはず、ついにりつばな俳人になり、当時としては日本人としての自覚もりつばに持った一茶を理解し人生を考へ人物を見る目を養ひおもしろくこの本を読んでもらひたい

◇1946 (S21)：小山内竜絵『一茶絵本』鎌倉文庫

- ・しじゅうひとりぼちの淋しがりやの人
- ・（お母さま方への中で）永い間の戦争でゆがめられた童心の再建こそは新生日本の文化的基礎工事でなければならぬとの見地を以て、その再建に當つてはまづ何よりも豊かな

情操の涵養に

◇1946 (S21)：日本童話研究会編『山国の昔語り』一陽社

*一茶の境遇や俳句を切り取った形で載せている。

◇1946 (S21)：相馬御風『一茶さん』実業之日本社

・この本は正しい一茶さんの伝記だけでなく、一茶さんといふ人について昔からあちこちに語りつたへられて来た逸話も多くとりいれました。

◇1947 (S22)：川島つゆ『少国民シリーズ 一茶おじさん』小学館

・一茶はいつも子供や動物のお友だちでした。

◇1949 (S24)：中村裕『信濃の一茶さん』泰光堂

- ・子供の時から立派な俳句をたくさん作った人
- ・一匹の虫にもなさをかける
- ・いつでもよわいもののみかた
- ・すねたりひがんだりすることもなく、正しい心ときよい愛情をもって子供のようにすなおな正直さとかかわいさをうしないませんでした。

◇1949 (S24)：白鳥省吾『なかよしこよし 一茶ものがたり』東山書房

・(おかあさまへの中に) 芭蕉や蕪村などと違った境地を持つ俳人です。(中略) 私の願いは、一つには幼い時から俳句を通して日本文学の良さを知らせること、一つには自分でも作って家族こぞつて楽しみのうちに情操教育に資したいことです。

◇1949 (S24)：猪野省三『世界お話の宝庫』新プレブス

- ・芭蕉や蕪村は、名だかい俳人ですが、一茶もすぐれた俳人となりました。
- ・くろうした一茶の俳句には、じぶんの身にひきくらべて、かわいそうなものをあわれむ気持ちがつよく出ています。

◇1949 (S24)：栗林農夫『少年少女伝記読本4 時代のまっ子』伊藤書店

・一茶の俳句はおもしろい。なんだかじぶんのいいたいことをいってくれたような気がする。だから、一茶という人はいままでもたくさんの人に親しまれてきた。しかしまた、一茶の俳句は、それまでの芭蕉や蕪村の俳句とはだいぶかわっている。へんにひねくれたようなところがある。一茶という人は、ふつとちがった変人で(中略) 一茶はほんとうにどういう人間だったのだろうか(中略) わかりやすく一茶の生涯を書いた

◇1950 (S25)：荻原井泉水『一茶物語』同和春秋社(参考)

- ・一茶は俳句つくりとして名高い人
- ・一茶さんというおじさんは今も生きているかのように思われるでしょう。それが、つまり、一茶さんのえらいところなのです。
- ・(後記の中に) 私は十年程以前に少年の読物として「芭蕉物語」というものを書いたことがある。(実業の日本社発行「芭蕉さま」に収む) 此の「一茶物語」はそれと対に作ったのである。だから「芭蕉さま」も此の本とあわせて読んでもらえれば

〔上記の児童用図書から分かる事柄〕

【芭蕉】

- ・俳聖・俳句の神様として、当然日本人として知っているべき存在として君臨している。
- ・呼び方も荻原井泉水のように「芭蕉さま」と崇められている。
- ・蕪村、一茶、千代女が目指した人。
- ・完璧と言える人物像。

【一茶】

- ・呼び方の多くが「一茶さん」というように、親しまれる存在。
- ・絵本としても多く出版されている点からも親しまれている人物。
- ・苦境を乗り越え一つのことを成し遂げた人として描かれている。
- ・苦しい生活を恨むことなく、全ての物に愛情を注ぐ人。
- ・小さな物にも愛情豊かな優しい人間として取られている。
- ・俳句が面白くて分かりやすい。

【全体】

- ・書いている筆者又は作者がその俳人を愛し、その業績や生き方を広めたいとしている。
- ・生涯を描いている作品が多い。
- ・業績とともに、生き方や人間性についても伝えている。

註

- 1) 海後宗臣『日本教科書大系近代編 第九巻国語(6)』講談社 1964.11.10 p610
- 2) 井上超『小学読本編纂史』岩波書店 1937.2.10 p66
- 3) 藤富康子『サイタサイタサクラガサイタ』朝文社 1990.6.20 p234
- 4) 前掲書3 p283
- 5) 中村喜久二『復刻国定教科書編纂趣意書 第七巻』国書刊行会 2008.9.25 p8
- 6) 秋田喜三郎『読本の體系的研究』晃文社 1938.9.10 pp. 64-65
- 7) 秋田喜三郎『初等国語教科書発達史』文化評論出版 1977.10 p363
- 8) 前掲書7 p547
- 9) 前掲書5 pp. 8-9 p14
- 10) 大岡保三「第二十蟲の聲 要説」(国語教育学会『小学国語読本総合研究卷十一(下冊)』岩波書店 1938.6.3 p256)
- 11) 前掲書6 pp. 87-88
- 12) 前掲書5 pp. 58-59
- 13) 前掲書10 p256
- 14) 前掲書5 p66
- 15) 前掲書6 p89
- 16) 前掲書6 p51

- 17) 緑葉山人『ポケット少年おとぎ』国華堂書店 1910.11
- 18) 山田可々子『少女お伽話』国華堂書店 1916
- 19) 川島つゆ『加賀の千代女』小学館 1942.10
- 20) 前掲書5 p114
- 21) 前掲書5 p136
- 22) 前掲書10 p256
- 23) 前掲書10 pp. 256-257
- 24) 前掲書10 p257
- 25) 西原慶一「第二十蟲の聲 指導」(国語教育学会『小学国語読本総合研究卷十一(下冊)』岩波書店 1938.6.3 p263)
- 26) 前掲書6 pp. 52-57
- 27) 前掲書5 p183
- 28) 前掲書5 p208
- 29) 前掲書6 p58
- 30) 前掲書1 p616・p615
- 31) 前掲書1 p615
- 32) 中村喜久二『復刻国定教科書編纂趣意書 第十卷』国書刊行会 2008.9.25 pp. 69~71
- 33) 前掲書32 p77・p80
- 34) 前掲書32 pp. 84-85
- 35) 前掲書32 p86
- 36) 前掲書32 p87
- 37) 前掲書32 pp. 91-93・p91・p93・p94